

# 2つの映画から見るベトナム戦争と アメリカのアイデンティティー ——敗戦の記憶——

01E002 安達嵩介

## I. 序論

2001年9月11日、米中枢同時多発テロが、オサマ・ビン・ラディン率いるアルカイダによって始まり、世界貿易センタービル、ピッツバーグ近郊、国防総省にハイジャックされた飛行機ごと激突し、アメリカ合衆国全体をかつて味わったことのない恐怖と混乱に陥れた。そして2003年3月19日にブッシュ大統領は国連の決議を無視してイラク戦争へと踏み切ったのである。そして湾岸戦争を上回る10,000発に及ぶ巡航ミサイルと精密誘導弾をイラク本土に打ち込み、20日足らずでフセイン政権は崩壊、アメリカが公表しているだけでも3,000人のイラク人が爆死され、劣化ウラン弾<sup>(1)</sup>により障害を受けた民間人は数え切れない。内政不干渉を反故にして多大な被害と屈辱をイラクに押し付けたアメリカ合衆国政府のこの戦争への大義は何だったのか。アルカイダとイラクの繋がりは未だに見えてこないし、大量破壊兵器がイラクに存在していなかったのは周知の事実である。大量破壊兵器が無いと分かるや「フセインにより虐げられているイラク民に真の平和(民主主義)を！」と大義を掲げ代えて戦争に踏み切った。推定有罪で決め付けて、戦争に踏み切ったアメリカの責任は大きい。

アメリカという国は“戦い”の歴史をなぞってきた国である。イギリスの植民地として長い間苦しみ、トマス・ペインの影響で独立戦争を8年間戦い続けて独立宣言を提唱。そして国内で南北戦争を戦い、第一次世界大戦にも終盤で参加し、第二次世界大戦では日本とドイツ、イタリアを相手に勝利した。第二次大戦の戦後処理から世界をまたにかけて旧ソ連相手に資本主義対共産主義構造の冷戦、局地戦となったベトナム戦争、イラク戦争の前哨戦でもある湾岸戦争を戦い、そしてイラク戦争に至る。それにソマリア等の内政干渉派遣を加えるとアメリカ生誕200年余の間、戦争をしていない時期は無かったのではないかと思えてくる。戦い抜いて勝つことからこそ得るものがあるとするアメリカのアイデンティティー、資本主義の根底から見えるアメリカの戦争の大義とは何なのか。イラク戦争を通してあやふやになりつつあるアメリカの戦争の“意味”を過去に遡って解いてみたいくなり、この論文を書くに至った訳である。

そこでどの戦争を取り扱うかにあたり、ベトナム戦争を選ぶことにした。圧倒的な兵力を持って攻め込んだ戦いだったにも関わらず、最終的には撤退を余儀なくされたアメリカの唯一の敗退、煮え湯を飲まされた戦争であり、イラク戦争にも通じることが多いという理由からである。

そして、あくまでアメリカ側の視点からベトナム戦争を見ていきたいということと、その時代時代を映し出す鏡としては最も適している参考資料となる、映画というポピュラーな文化媒体を用いることが必要と思われた。この論文ではベトナム戦争を主題にした二つの映画『ディア・ハンター』と『プラトーン』をとりあげる。両映画ともに高い評価を受けたハリウッド映

画という共通点を持っている点が意味のある比較になりうると認識しての選択である。

## Ⅱ. ベトナム戦争と本論文使用映画の概要

### 1. 戦争の概要

1961年ジョン・F・ケネディーが米国大統領に就任し、「全人類の世界に平和を！」というスローガンを掲げ、キューバやベトナムなどの共産主義国家に対して軍事介入を強化するようになる。南北に分かれたベトナムは、北がベトナム労働党で南ベトナム民族解放戦線<sup>(2)</sup>を統率したホー・チミンと、南はアメリカから支持を受けており社会主義の防波堤としてアメリカから期待されていたゴ・ディン・ジェム大統領のサイゴン政権との争いになり、1963年11月1日にサイゴンでクーデターが起こりジェム大統領は殺害される。そしてアメリカでは11月22日にケネディー大統領が暗殺され、代わって副大統領のジョンソンが大統領へと就任する。翌年8月2日には南シナ海のトンキン湾でアメリカの駆逐艦マドックスが攻撃される事件が起こり(トンキン湾事件)、北の侵害による攻撃だとして南への強化を強め8月7日にトンキン湾決議を可決し、本格的なベトナム戦争へと突入していく。

1965年2月7日、プレイク米軍基地が攻撃を受けアメリカは北爆<sup>(3)</sup>を本格化させ、B52の南ベトナム解放戦線への爆撃、枯葉剤の散布<sup>(4)</sup>、米海兵隊19万人をダナンに上陸<sup>(5)</sup>させたり、とベトナム戦争は泥沼化していく。

アメリカでは当時戦争に対する報道束縛が緩かったため、北爆の実態やベトナムの民間人が犠牲になる映像がテレビを通して毎日伝えられたため国内では反戦ムードが高まり、徴兵拒否や反戦を掲げたデモ行進が多発するようになる。1968年には南ベトナム解放戦線のテト攻勢<sup>(6)</sup>が開始され、サイゴンのアメリカ大使館の占拠や、フエ攻防戦・ケサン攻防戦により南ベトナム軍＝アメリカは劣勢になってくる。この時点でもアメリカ兵だけで死者の数が3万人を超えておりジョンソン政権も不振となっていき、結果、年末の大統領選挙ではニクソンが大統領に当選する。

ニクソン大統領は泥沼と化したベトナム戦争から抜け出すために、「法と秩序の復活・ベトナムからの名誉ある撤退」を掲げ1973年1月27日「ベトナムにおける戦争と平和の回復に関する協定」にアメリカ、サイゴン政権、ベトナム民主共和国、南ベトナム解放戦線の4者が調印し停戦協定を結んだ。3月29日ニクソン大統領はベトナム戦争終結を宣言し、アメリカは南ベトナムから撤退する。

その後は、南ベトナム政府軍と北ベトナム軍の戦争となり、1975年4月30日、北ベトナム軍はサイゴンへ入り、南ベトナムのズオン・バン・ミン大統領は無条件降伏をし、長く泥沼だったベトナム戦争は終結した。

### 2. 作品の概要

#### (1) 『ディア・ハンター The Deer Hunter』

1978年製作 監督＝マイケル・チミノ 主演＝ロバート・デ・ニーロ、クリストファー・ウォーケン、ジョン・サバージ、メルリ・ストリープ 第51回アカデミー賞＝作品賞、監督賞、助演男優賞、音響賞、編集賞、計5部門獲得

### i. 作品内容

アメリカ、ペンシルヴェニア州クレアトン。鉄鋼所で働く鹿狩り好きのマイケル、ニック、スティーブンの3人はスティーブンの結婚式の2日後にベトナム戦争へと出征する。ベトナムで想像以上の反撃を受け、3人は解放戦線の捕虜となり、そこでロシアンルーレットの拷問を受け神経を狂わされていく。マイケルの機転で脱出に成功するも、その後ニックは精神に異常をきたし戦時病院を抜け出し、ベトナムの町へと消えていく。スティーブンとマイケルは帰国するも、スティーブンは左腕と両足を失い障害者施設から動けず、マイケルも以前のような陽気な彼ではなくなっていた。そんな時、ふとした事からニックがまだベトナムのサイゴンに居ると勘づいたマイケルは、ニックを迎えに単身ベトナムへと赴く。しかしニックはすでに記憶と感情を失い、ロシアンルーレットの闇賭博場でマイケルと勝負したニックは自分の頭を打ち抜くのだった。

### (2) 『プラトーン Platoon』

1978年製作 監督=オリバー・ストーン 主演=チャーリー・シーン、トム・ベレンジャー、ウィレム・デフォー 第59回アカデミー賞=作品賞、監督賞、編集賞、録音賞、計4部門獲得
---

### i. 作品内容

オリバー・ストーンのパトナム戦争3部作の最初の作品(他、『7月4日に生まれて』<sup>(7)</sup>と『天と地』<sup>(8)</sup>)。1967年、両親の反対を振り切り、大学を辞めてまで国に尽くしたいと思いベトナム出兵に志願したクリスはいきなり最前線の戦闘小隊(プラトーン)に配属され、いつ殺されるかも分からない戦争の過酷な現実を目の当たりにすることになる。指揮官であるバーンズとエアスの葛藤は隊内全体を混乱させ、ベトナム独特の気候風土は肉体と精神を狂わせる。そして虫けらのように死んでいく人々を見て、クリスは何が正しいのか分からなくなっていく。ラストのカンボジア国境付近での激しい戦闘を終えて除隊する頃にクリスはこの戦争の自分なりの答えを見付けるのだった。

## Ⅲ. 『ディア・ハンター』と『プラトーン』の比較・分析

### 1. 出兵動機から見てくる多様なアメリカ社会

まず『ディア・ハンター』では、出兵前の明るく陽気な雰囲気が印象深い。ペンシルヴェニア州クレアトンという四方をアレゲニー山脈に囲まれた鉄鋼業のこの町は、観光客も訪れないような田舎町だが、そこに住む人々はそれぞれの人生を見出して暮らしている。鉄鋼所仲間のスティーブンが同じ町に住むアンジェラとの結婚式を前日に控えて、マイケル達悪友はピリヤード、ラグビー観戦、酒に歌にと興じる。そして趣味のディア・ハンティング(鹿狩り)を楽しむ。結婚式のシーンでもダンスと歌のロングカットを華やかに映し出し、2日後に出兵するマイケル・ニック・スティーブンを祝福したり、ニックも幼馴染のリンダと、帰還したら結婚の約束を交わすなど全体的に不安よりも期待と希望が垣間見える演出が先行されている。

しかしその明るい場面の中にも忍び寄る、隠すことの出来ない不安と恐怖も同時に描かれて

いる。それが最も顕著に表れているのが結婚式での披露宴でマイケル達がベトナムからの帰還兵に出会う場面である。ベトナムの現実を知らないマイケル達はその帰還兵に対して "I hope they send us where the bullets are flying?" や、「ベトナムでの戦況はどうなっているのか？ 向うではどんなことに気をつければいい？」という事を聞くのだが、その問いに対するグリーンベレーの返答は "Fuck it" の一言だけである。マイケル達はこれから戦場に出られるという一種の興奮と期待で明るいのだが、その帰還兵は絶望の底にいるような暗さで、これから戦場へ出向く者と本物の戦場を味わった者との温度差(コントラスト)がくっきりと写し出されている。そして、結婚式で新郎新婦がグラスに注がれたワインを飲み干せれば生涯幸せになれるという儀式の時に、新婦が偶然にもワインを数滴こぼしたのも、この戦争はマイケル達が考えているような気楽なものではないという伏線に繋がっている。血気盛んな彼等も実際の心境としては本当に帰ってこられるのか不安だと吐露したり、ニックもマイケルに "You gotta promise definitely, don't leave me over there." と頼んだり、彼ら自身も出兵に対して不安を隠せない様子を見せている。

それに反し『プラトーン』では仲間同士での裏切り、ベトナム人の虐殺、発狂寸前の精神状態と作品全体を通して明るい場面を見付けること自体が難しい。オープニングで新兵としてベトナムに到着したクリス達の目の前で、戦死したアメリカ兵の死体袋の搬送が行われているのが先の不安を暗示させる。クリスの出身は作品の中では明かされないのだが、クリスの出兵動機の1つが、出兵しているほとんどの人々が社会階級の低い人々で、主としてこの人々が国のために戦争で戦い、傷ついていることに疑問を持ち、自分も国のために尽くしたいという思いから出兵を決意していることから、彼が中流階級以上の出身だと推測出来る。彼の明らかになっているもう1つの動機として、大学を卒業して優良企業に就職してほしいという俗物主義の両親からの反発というところも興味深い。『ディア・ハンター』でマイケル達は、年齢的にも臺が立っているのに関わらず徴兵されて半ば強引に戦場に借り出されたのに対して、クリスは学生の身分で大学を中退してまで志願兵としてベトナムへ赴いたのである。彼は作品中で "Do my share for my country. They come from the end of the line. Small towns you never heard of. Tennessee, Mississippi, Pennsylvania. They're poor and unwanted yet, they're fighting for our society and freedom. They're the best I've ever seen." と独白している。しかもクリスがベトナムに出兵したのは1967年である。この年は過度な北爆やゲリラ戦により、ベトナム戦争が泥沼化してきた年でありニューヨークやワシントンで10万人規模の反戦デモや、学生による大学内占拠デモがおきた年である。つまり戦場的にも最も苛烈で、アメリカ本土においても反戦ムードがピークに達しており、これ以上無い悪条件の時期に出兵したという事だ。ちなみに出身と同じくクリスの具体的な年齢も作品中で公表されることは無かったが、少し正攻法ではないにしても、当時のクリスを演じたチャーリー・シーンが1965年生まれで撮影当時22歳であり、クリスがベトナムに出兵したのが1967年であることからクリスの誕生年が1945~50ぐらいではないかと想定できる。面白いことに、50年代とはアメリカが旧ソ連を相手に冷戦を繰り広げていた頃で、共産主義を相手にアメリカという国自体が保守的傾向へと進むと同時にベビーブームによりアメリカの総人口が30%上昇した年である。この世代に生まれた子供は両親から品行方正を押し付けられて育った子供が多く、精神的に閉塞状態に陥り、両親の世代との断絶が顕著に表れた事例が多々存在し、生きがいを見付けられない人々が多かった。クリスも両親に反抗して戦争に参加することによって、自分の存在証明をしたかったのかもしれない。その裏付けとしてクリ

スが戦場で自分の気持ちを手紙を通して吐露する相手は両親ではなく彼の祖母である。このようにクリスの出兵動機は全て彼なりの正義感に由来しているものなのである。それ故に彼は戦場での悲惨さを現地で思い知ることになり、先の正義感の底の浅さに気が付き、退役までを今か今かと待ち望むようになる。戦場という場では、この世代の若者の中途半端な倫理・思想などいとも簡単に吹き飛ばすという事に身をもって気付くのである。

出兵前の状況から見ても『ディア・ハンター』が華やかな一面を持っているのに対して『プラトーン』は冒頭から重くて暗い。この違いは何なのか、恐らく『ディア・ハンター』では監督のマイケル・チミノがベトナム戦争に対するアメリカの立場(正当性)に何らかの希望を抱いていたのではなかろうか。希望というよりも、決してこの戦争はアメリカにとって無意味ではなかった、という隠れたメッセージが伝わってくるようだ。勿論、ベトナム戦争に対するアンチテーゼを柱として見せてはいるのだが、それでも最強の戦士ジェロニモ<sup>(9)</sup>を称える歌を大声で熱唱したり、結婚式の場面では悠然とアメリカ国旗が至る所に飾りつけられていたり、さり気ない場面で祖国アメリカの素晴らしさをサブミリナル的に映し出しているように思えてならないのだ。

『プラトーン』はアメリカ軍隊内部との戦い、というプロットがあるだけにアメリカだけを徹底的に悪として描き、この戦争は間違いだった、と見ている者に「反省」を促すように描かれている。それは監督のオリバー・ストーンが実際にベトナム戦争に徴兵された経験があり、そこで戦争の悲しさ、無意味さを実感した表れなのかもしれない。それでは出兵動機の相違は何を表しているのか。『ディア・ハンター』は徴兵された者達の物語であり、意気揚々としてはいたが決して自発的に戦争へ向かった訳ではない。言い方を代えれば戦争に巻き込まれた者、という一種の被害者の観点から作品を見たかった故の理由があったのではなかろうか。その後の展開でも、マイケル達が捕虜にされたり、甚大な肉体的・精神的被害を戦後に被ったりと、ベトナム戦争で最も傷ついたのはベトナム人ではなくアメリカ人であるという印象を受ける。それは初めての敗戦でナイーブになっていたアメリカ人の心の表れなのか、ベトナム人に対する一種の憤怒の表れなのかは分からないが、反戦というメッセージの影に自分達への自己愛が存在していることは確かである。反面『プラトーン』は、戦争に巻き込まれた者ではなく自発的に戦場へと進んだ者の物語である。これは恐らく監督の意図として、クリスが体験することになる地獄のような環境をより後悔させたかったから故の設定であると考えられる。つまり、甘い理想を掲げるために出兵したクリスが、後に本当の戦争の姿を知り、戦争というものには理想や希望などありはしないという気付きを、クリスを通して見ている者により強く伝えたかったのだろう。ベトナム戦争に対する反省というメッセージを作品全体に盛り込んだ監督の確信的設定と言える。

## 2. 南ベトナムの農村への侵略：アメリカの描かれ方

『ディア・ハンター』では先にあったスティーブンの結婚式の場面から一転して南ベトナムの小さな村での戦闘場面に切り替わり、見ている者に急なショックを与える。マイケル達の部隊は、北ベトナム軍の部隊が同じベトナム人である南ベトナムの村民達を虐殺しているとの情報を受け、村民達を助けようと解放戦線との戦闘を開始するところから始まる。北ベトナム軍による侵略は無差別の爆撃に加え、村民が10人近く隠れていたトーチカに手榴弾を投げ込み、走って逃げ出す母子をライフルで撃ち殺し、最終的には村に火を付けるといった残虐極まりな

い行為が展開していく。そしてマイケル達の軍隊も反撃に出るのだが、思わぬ北ベトナム軍の反撃を受け、マイケル・ニック・スティーブンの三人は解放戦線の捕虜となってしまうのであった。

『プラトーン』でも南ベトナムの小さな村への侵略シーンがあるのだが、こちらの綿密な演出とアメリカ軍による非人道的な振る舞いは『ディア・ハンター』とは比べ物にならないほど細部に渡って描かれている。1968年1月に解放戦線がベトナム全土で全面的な大攻勢に転じる、俗に言うテト攻勢である。クリス達の戦闘小隊プラトーンが進行していたカンボジア国境付近でも北ベトナム軍の攻撃が激化してきており、ジャングルの中で仲間達が次々に倒れていく。そしてクリス達はジャングルを抜けた川沿いで、殺されてさらし者になっている、同じ部隊内のマーニーというアメリカ兵を発見するのである。怒り狂った指揮官の一人、パーズは近くの丘に小さな村があるのを発見し、そこへ部隊を引き連れて侵略に向かう。『ディア・ハンター』とは異なり侵略の動機が描かれているのも興味深い。村ではパーズ指揮の元、村民を一箇所に集めて、北に預けられた武器を出せ！と脅しをかける。北に無理やり預けられた武器が発見されると、パーズは村民達が解放戦線の居場所を必ず知っているはずだと決め付け、銃口を幼い子供にまで押し付けて聞き出そうとする。そこへもう一人の指揮官であるエアリスがパーズを殴って止めにかかるのだが、結局は上層部からその村の破壊と村民の連行命令が下ってしまう。この場面は作品中を通して人間の残虐性を最も表現している衝撃的な場面である。威圧的なアメリカ軍に抗議した老女をいとも簡単に銃殺したり、村民の若い女性を影で集団強姦したりする、その時の兵士は「敵の女を犯して何が悪い！」とクリスを罵る。そして、そのクリスも村では今までの彼とは違った一面を見せている場面がある。足を片方無くして歩くのが困難な村人の一人に、「何故、ニヤついているのだ！」と悪態をつくのである。しかし、彼は決して笑っていた訳ではなくて、片方の潰れた目と、自然に囲まれて暮らす村民独特の白く光る歯が、クリスには笑顔と見えただけであった。クリスは挑発されたと信じ込み、彼の足元にライフル弾を打ち込み「踊れ！」と脅す場面がある。戦場という特殊な環境にあって変わっていく純粋な青年がクリスを通してうまく描かれている。クリスは後にも戦場という場で変化を遂げていくのだが、ここも『ディア・ハンター』では描かれていなかった点で興味深い。結局クリスに脅された村人は、同じ部隊内で新兵として配属されて間もないパーニーという兵士に「クリス、嘗められるな！」と言ってパーニーに撲殺されてしまい、その母親をも「マーニーを殺したのはこの婆に間違いない！」という証拠もない理由で殺害しようとして仲間止められる。アメリカの狂気を象徴しているような恐ろしい場面である。

ベトナム戦争では実際にアメリカ軍が南ベトナムの村を侵略していた事例がいくつも存在する。特に有名などころでは1968年3月に南ベトナム、クエンガイ近くのミライにあるソンミ村で起きたソンミ村虐殺事件が頻繁に挙げられる<sup>(90)</sup>。軍事目的のためにアメリカ軍が襲撃した事件で、4時間で女性・子供を含む村人504人が虐殺されている。後にソンミ村の生存者が語るによると、当時の状況は地獄そのものだったという。早朝に突然アメリカ軍の砲撃が30分間続き、計20機のヘリから戦闘中隊がなだれ込んできて村民に片端から銃弾を浴びせ掛け、退避壕には平然と爆薬を投げ入れた。女性には手当たり次第の強姦を繰り返し、用が済んだら即射殺。子供や赤子も容赦なく殺害し、家畜も殺され、村は燃やされた。

この事件はベトナムに対する侵略行為の中でも最大規模とされており、後にアメリカ本国の

裁判で指揮官に対して有罪判決が出た珍しい事例<sup>(10)</sup>だが、ベトナムが被った侵略行為は日常的に繰り返されていたというし、「卑劣なインディアン種族の地域に住む害虫共を駆逐して何が悪い」というイデオロギーが当時のアメリカ兵士の中で根付いていたという報告もある。

こうした侵略行為についてはこの2つの映画では明らかに描き方に相違点が見られる。『ディア・ハンター』では侵略場面のカットが時間にして(本編183分の中で)5分にも満たないこともあり、不十分な描写になってしまっており、アメリカ軍にしてもベトナムの村民にしても北ベトナム軍にしても、当時の感情が伝わるどころまでいかず、ただ淡々と事実のみを見せられている気がする。しかも、その村を襲っているのはアメリカの部隊ではなく北ベトナム軍の方なのである。『ディア・ハンター』の中で北ベトナム軍が村民に対して行う虐殺は、全てアメリカ軍がベトナム人に対して行った行為そのものだ。ソンミ村の事件だけに止まらず、アメリカ軍による侵略は軍事目的の元に連日執行されており、その無差別攻撃で200万人以上の人々が命を落とした。そのような残虐行為を同胞であるはずの南ベトナム軍に擦り付けて、自分達はそれを救った英雄だとして描き出そうとしている姿には疑問が残る。このような大規模な同胞虐殺の何倍もの数の虐殺がアメリカ軍によって行われていたことを考えると、後に詳しく語るが、チミノがいかにもベトナム人を「悪」の一面性だけで捕らえているのかがよく分かる。『ディア・ハンター』においては、侵略場面というベトナム戦争を描くにあたって最重要な点でメッセージとして伝わってくるのは、正義の国アメリカと悪の国ベトナムという構図だけである。監督がこの映画にはアメリカ軍が犯した犯罪行為に対して何を考え、何を思ったのかということ、見ている者に伝わらないのである。言い換えれば、チミノ自身がこの犯罪行為に対しての思い入れが薄かったから、むしろこの犯罪行為に対して、何らかの酌量の余地(隠れざる正義)があったと考えていた、という推測も成り立つのではないだろうか。

彼は作品におけるインタビューの中で「ベトナム戦争を描こうとか政治的メッセージを盛り込もうなんて思わなかった。ただスラブ系の若者達が直面した戦争という危機に、彼らがどう対処したかをブルーカラーの若者の叙事詩として描きたかったのだよ」<sup>(11)</sup>と語っている。つまり、感情論は無しにして客観的に映画の登場人物達をカメラで追いたかったということだろうか。このインタビューが彼の本音なのか、それとも一部からベトナム人の不当な描き方をしているという批判<sup>(12)</sup>からの擁護だったのかは明らかではないが、はっきりとこの作品からは様々なチミノの感情(当時の多くのアメリカ人がおそらくは共有していたと思われる感情)を感じ取ることが出来る。それは戦争の悲惨さに隠れて見える本国アメリカの賛歌のように思われる。侵略場面の扱いが少ないのもチミノ自身が正義の国アメリカがこのような非人道的行為をする訳が無いという思いが働いた故なのかもしれない。第二次世界大戦の最中に生を受け、正義の祖国アメリカがドイツ・イタリア・日本の独裁国家を打ち破り、世界の平和を守ったと実感して育った彼にとってベトナム戦争というアメリカの影の部分ばかりがクローズアップされた戦争は、出兵していない彼にとってもまた地獄だったのかもしれない。

では、第二次大戦後に生まれたオリバー・ストーン監督の描き方はどうか、こちらは『ディア・ハンター』とは異なり(本編120分の中で)約30分程度を侵略場面に当てている所を見ると、こちらは真面目にこの問題に取り組む姿勢が見て取れる。ここで描かれているものは、ソンミ村虐殺事件を彷彿とさせるアメリカの狂気そのものである。了解も得ずに村に侵入して無理やり、北に預けられた武器を発見するや、「お前等は解放戦線をかかまっているな、やつらの居場所を吐け！」と怒鳴るバーンズ達の態度はアメリカの狂気を通り越して、人間に秘められてい

る凶暴性を垣間見ることができる。開幕から荒くれているバーンズやバーニーはともかく、入隊直前には解放戦線の兵士相手にライフルの引金を引くことも出来ずにいたクリスが、ベトナムに四ヶ月ただけで無害な村民に銃を突きつけることに抵抗を感じなくなっているこの変身振りはどうか。他にもクリスはこの事件の後に、米軍キャンプの中で「絶対バーンズをぶっ殺す！ そうしないと俺達が殺される！」と繰り返して仲間達に怒鳴り散らしていた。『プラトーン』で描かれていて『ディア・ハンター』で描かれなかったものの一つとして、主人公が戦場の中でどう変わっていったか、という点が挙げられる。『ディア・ハンター』では除隊後に、戦争を通してどう変わっていったかが中心的に描かれていたが、その分戦場での変化はあまり描かれていなかったように思われる。もともと物静かで高等教育も受けていた裕福な青年が、何故に戦場という非日常的な環境で、こうも変わっていったのか。ストーンは実際にベトナムに出兵して地獄を見てきたと語り、後に『プラトーン』を始め、ベトナム戦争3部作を撮っているが、どの作品でも戦場を通して変化する人物を描いているストーンはこの作品を通して伝えようとしているのは、アメリカという国の、他国への「戦争」という名前を借りた、暴虐不尽な行いに対する反省・警告ではないだろうか。それを最も象徴したのが、村での事件を経て、エリアスがクリスに語った "We're gonna lose this war. We've been kicking other people's asses for so long. I figure it's time we got ours kicked." というセリフだ。これを聞いたクリスは "You really think so?" と鼻で笑うのだが、このセリフにこそ、この作品の全てが詰まっていると考えていい。

物語の主人公としてクレジットされているのはクリスだが、物語の核を担う人物はエリアスとバーンズである。クリスはただこの2人の思想間を行き来する放浪者であり、エリアスとバーンズこそが物語上の、両極の柱と言える。エリアスはストーン自身の思想・理想を体現している人物である。暴力による支配には断固反旗を掲げ、大きな権限(指揮官)を持つ立場ながらも弱者の為に行動する。反面、バーンズはストーンが批判する、暴力による支配も立場上辞さないという危険思想を持った人物である。エリアスと共に大きな権限を持つも、それを糧に自分の私腹を肥やす為に行動する。ここで気が付くのは、兩人ともが、それぞれのアメリカという国を表しているという点である。エリアスはストーンが理想とするであろう巨大な国力を弱小国家に対しての救済に使い、共存の道を探そうとする、真の正義の国家の象徴であり、バーンズはベトナム戦争におけるアメリカ国家、つまり現実の姿の象徴である。理想と現実のギャップに矛盾点を感じながらもストーンはこの物語を描いている。では、そこにおけるクリスの役割は何なのか。エリアスとバーンズがアメリカというこのような、両極の二面を持つ「国」と解釈するならば、クリスはそこに住む「国民」と言えよう。人は国という地域媒体を持って始めて国民と言える、そして様々な影響を受けて成長していく。クリスは出兵当初、薄っぺらい正義感しか持たない「色」のない人間だった。しかしエリアスやバーンズの影響下にあった彼にも少しずつ自分なりの色が見えてくるのを実感する。実際彼は、両者の思想の間で悩み苦しむ、答えを導き出していく。その所については後で詳しく触れるが、当時のアメリカ首脳陣、ジョンソン大統領やマクナマラ国務長官はベトナムを共産主義の防波堤と考え、ドミノ理論<sup>(4)</sup>という偽りの正義の名の下に、手段を選ばない強硬手段に打って出た。そのバックボーンを投影しているのが、バーンズである。では、最終的にエリアスという理想が投影されていくのはクリスかということ、そうではない。実際のアメリカという国が、このような道を辿ったのと同様に、クリスは物語が終盤に近づくにつれて戸惑いを感じつつもバーンズの影(アメリカの狂気)を帯びていくようになっていく。中途半端な明るい理想論を掲げて終幕となることが多いハ



リウッド映画にとって、自国の反省というテーマを最後まで突きつける『プラトーン』の作品構成は異色と言える。この作品には最終的にも「救い」は用意されていない。後に述べるが、そこが『ディア・ハンター』と大きく異なる。では、クリスがこの農村への侵略をきっかけに最終的にどのように変化していったかを、次に詳しく見ていきたい。

### 3. 戦闘場面にみる「悪」とは

『ディア・ハンター』で最も有名なシーン、ロシアンルーレットの場面は唐突に、ルールや理由もなしに始まる。解放戦線の連中に囲まれながら、机を挟んでマイケルとスティーブンの命を掛けたロシアンルーレットが始まる。スティーブンは、あまりの恐怖に涙を流しながら発狂するも、マイケルに諭されながら、両者とも引き金を引いていく。結局、スティーブンは恐怖に負けて銃口を空に向けて放ち、解放戦線の連中から暴行を受けるが、両者とも一命は取り留めた。しかし間髪入れずに、次のアメリカ人の捕虜達を使ったロシアンルーレットが始まり、片方の捕虜が「当たり」を引き、頭から大量の血を噴出しながら倒れ、骸となったその捕虜はあっさりと川に投げ捨てられる。初めてこの場面を見る者にとって、ここは衝撃的な場面である。恐怖にかられながらも銃口を引き、銃弾が脳天を貫いた時の、アメリカ兵の苦悶の表情と空高く噴出す血潮は、見ていてやりきれないものがあるし、その血潮を見て歓声を上げて、賭け事の対象としている解放戦線の連中は作品の中で「悪」そのものとして描かれている。体力的・精神的に追い詰められていたマイケル達3人は、マイケルとニックでロシアンルーレットの勝負を申し込み、そこで拳銃を解放戦線の連中に向けて発砲し皆殺しにして、この簡易収容所から逃げ出そうという計画を立てる。計画は辛くも成功して、マイケル達はアメリカ軍のヘリにより戦線からの脱出に成功するのだった。

『プラトーン』では、農村の侵略が終了して間も無く、解放戦線とのジャングルでの戦闘場面が始まる。地の利を生かした解放戦線部隊に、奇襲の形で襲われて、アメリカ兵は次々と倒されていく。しかもここでもエリアスとバーンズのいがみ合いが始まり、部隊は混乱してしまうが、急遽助けにきたアメリカ軍爆撃機により解放戦線を退けることに成功する。しかし、その爆撃により部隊と離れ離れになってしまったエリアスを見付けたバーンズは、非情にもエリアスに向けてライフルを発射してしまう。クリス達の部隊がヘリで戦場を離れる時、地上では奇跡的に一命を取り留めていたエリアスが解放戦線の軍隊に攻撃されて逃げ回っていたが、救助を申し出るクリスに、バーンズは「戻ったら俺達が危険な目に逢う、部隊を危険な目に逢わず訳にはいかん！」とエリアスを見殺しにする。後のキャンプで、エリアスが殺された事に憤りを隠せないクリスは、バーンズがエリアスを殺したと決め付けて食って掛かるが、逆に打ちのめされてしまう。

何が正しいのかがまるで分からなくなり混乱し続けるクリスは、近くのジャングルに北の第141師団が潜伏しているとの情報を受け、休む間も無く次の戦闘へと駆り出されていく。そこでの戦闘は、自爆攻撃も辞さない解放戦線の攻撃<sup>(9)</sup>により苛烈を極め、クリスも足を負傷してしまう。しかも狂気に駆られていたバーンズは、クリスをも戦闘に乗じて殺そうとする。その瞬間、アメリカ軍の低空爆撃が偶然バーンズを吹き飛ばし、クリスは事無きを得る。この、クリスを殺そうとするバーンズの鬼のような狂気が入り混じった表情は、一際恐ろしいものがある。戦闘終了後、気絶していたクリスは、目を覚まし瀕死状態のバーンズを見付ける。クリスに気が付いたバーンズは助けを求めるも、クリスはそこでバーンズに銃口を向ける。諦め悟ったバ

ーンズはクリスに「殺れ」と命じ、クリスはためらいも無くバーンズを撃ち殺すのだった。

ベトナム戦争だけでなく、戦争と名の付くものには常に捕虜が虐待にあったというニュースがつきまとう。ハリウッド映画から見ても、アメリカ兵が敵国の収容所に連れて行かれて虐待にあうという作品をよく見かけるし、最近でも、イラク戦争でアメリカ兵によるバグダッドの米拘置施設でのイラク人捕虜に対する暴力的・性的虐待が問題になった。『ディア・ハンター』で描かれたような出来事もあながちフィクションとはいき切れないのだ。しかし、調べて目立ったのは逆に「アメリカ軍による」ベトナム兵に対しての虐待の方であった。

先のソンミ村での事件にしてもそうだが、ハーグ条約<sup>(6)</sup>、世界人権宣言<sup>(7)</sup>で禁止されている非戦闘員の殺害を反故にして、女子供を含む200万人以上の非戦闘員が虐殺され、村落はあらゆる手段を持って破壊し尽くされた。捕虜に対しての虐殺も盛んで、捕虜となった解放戦線の兵士が白昼に公衆の面前で次々と頭を銃で撃たれ殺された映像が、テレビを通して世界を駆けめぐり、フラワーチルドレン<sup>(8)</sup>達の反戦デモを更に加熱させるに至った。

両者の作品を比較する時の大前提として、『ディア・ハンター』ではアメリカ人が「正義(被害者)」でベトナム人が「悪」、『プラトーン』ではアメリカ人が「悪」でベトナム人が「被害者」という絶対的な立場があるというのは今更言うまでもない。その構図が一番浮き彫りになるのが、『プラトーン』では先に挙げた農村への侵略場面なのだが、『ディア・ハンター』ではこのロシアンルーレットの場面ということになる。捕虜が脳天から血が噴き出すと歓声を上げて喜ぶ解放戦線の姿は、往年の『007』シリーズや西部劇の悪役と何ら変わらない。つまり解放戦線、及び後に出てくる全てのベトナム人に対しての描き分けが全く存在しないのである。全員がただの悪役であり、そこには個性も大義も信念も何も無くただ「悪」という一面性しか持ち合わせていない。チミノの考えるベトナム人とは、人を殺すことに何も罪悪感を覚えず、むしろそれを喜びの一つと捕らえているような悪鬼であり、その矛先はアメリカ軍だけにとどまらず同胞であるベトナム人にすら及ぶというものと解釈されても仕方ないであろう。

そして『ディア・ハンター』はこの辺りから、本格的にこの作品が反戦という皮を被った「アメリカ擁護」が色濃く出てくることになる。実際のベトナムを知らず、良い意味でも悪い意味でもこの作品において愛国的要素が濃く見えるチミノにはベトナム人はただの敵(悪)にしか見えていない。それは奇しくも第二次世界大戦時にアメリカ全土の人々のイデオロギーに存在したであろう、独裁国家(ドイツ・イタリア・日本)に対するものと同じであり、アメリカと敵対するものは国単位で悪であるという思想を抜本的に変えるのは、当時のアメリカの正義を信じるならば、なお更なこと難しいのだろう。皮肉にもベトナムに対する彼のイメージが、そのまま彼の愛するアメリカに当てはまるかのようだ。ベトナム戦争を終えて何年も経ってからソンミ村を始めとする虐殺事件が浮き彫りにされ、アメリカの恥部が次々と明かされてきた。罪悪感を覚えず、同じ虐殺を繰り返しているのはベトナムではなくアメリカなのだ。

『プラトーン』では、物語も終盤に向かっていき、エリアスとバーンズという作品上の絶対的人物の死を通してクリスは どう変わっていったのかに焦点を当てて見ていこうと思う。

バーンズのこの作品における存在意義は、「アメリカの狂気」だけではない。バーンズは、真の意味で人間の姿の象徴でもあると思う。恐らくバーンズは表面上とは異なり、それ程強い人間ではない気がする。バーンズは作品中の数あるキャンプシーンで常にドラッグと酒に溺れており、エリアスを殺しクリスを殴りつけた時も、またそんな時だった。戦場とは死に溢れ、日

常生活からはかけ離れた異質な空間である。そこには道徳や正義が存在せず、恐怖と混乱が渦巻いている。そのような殺す・殺されるが当たり前の空間に放り出されて正気を保てる人間などいるはずがあるまい。作品中でも兵士達が酒にドラッグ、ギャンブルに興じる場面は多く出てくるが、それはこの異常な現実において自分の感情を麻痺させるという逃避のためである。バーズはその癖が他の兵士よりも強いように思える。鬼の指揮官と周りから恐れられているバーズが、そうすることでしか自分を保てないという弱さをさり気なく見せているのだ。

クリスを殴りつけた時、バーズは "Elias was a crusader. Now, I got no fight with any man who does what he's told." と怒鳴りつけた。エリアスは先にも述べたとおり、オリバー・ストーンが描くアメリカの希望の象徴である。バーズは、そんな叶えられもしない幻想を戦場でただ一人心の奥に持っていたエリアスを許すことが出来なかったと考えられる。戦争とは、現実とはそんなに甘い理想が通る場所ではない、ただ命令に忠実に働き敵を倒すことが兵士としての全てだ、と考えるバーズにとってみれば、エリアスの存在は自己のアイデンティティーの矛盾を生むことになり、認める訳にはいかなかったのだ。戦闘終了時にクリスは満身創痍のバーズを見付け、銃口を突きつける。クリスを見たバーズは "Get me a medic." と言うも、最後には観念したように "Do it!" と言い放ちクリスに射殺される。その時のバーズの瞳も何かを淡々と物語っている。これから殺されるという場面にも関わらず、その瞳には安堵の感情すら見て取れる、それはこの狂った世界からの別離、自分の作ったアイデンティティーからの解放を望んでいるようにも思えた。バーズは「アメリカの狂気」を象徴すると共に残虐な行為を引き起こしたアメリカ兵の心境をも描いているようである。

人間がいかに虚勢を張り、他を侵略していっても所詮は人間など弱くてちっぽけな存在であり、この侵略戦争自体に意味などあろうはずがない、とストーンは我々の深層心理に囁きかける。クリスは正しい者が殺されて悪しき者がのさばることに疑問を感じて、元凶であると信じるバーズを憎み始める。"I say we frog him tonight." と意気込み、最後には何のためらいもなくバーズを射殺する。しかし、その負の感情にさいなまれていき、殺人をも正当化させていく様子こそが奇しくもバーズに近づいていると言えるのではなからうか。クリスもベトナムに来たばかりの頃は、エリアスのような理想を戦場に求めていた。しかし、次第に戦場に理想を持ち込んでも仕方が無いと悟り、人間らしい感情を排除するようになる。戦場におけるコンセンサスとはバーズの方であり、エリアスのように自分の理想・正義を保てる方が異端なのである。それでもストーンはアメリカのあるべき姿を、戦場という特殊な環境でもエリアスのような困難な立場を保って接してほしいという願いを、メタファーに包んで見ている者に語りかけているような気がする。

#### IV. 作品から読み取れるベトナム戦争の意味とアメリカのアイデンティティー

『ディア・ハンター』では、無事アメリカ軍のヘリにより救出された三人はそれぞれの病院へと送られる。特にニックは精神的に障害をきたし、病院を抜け出して夜のサイゴンを歩き回る。そこで、ベトナム人実業家が経営する違法な闇賭博の小屋に立ち寄り、その中でベトナム人やアメリカ軍の捕虜を使ったロシアンルーレットに興じて賭け事をしている集団を目撃し、解放戦線に捕らえられた時の悪夢を思い出したニックは、再度その命懸けのゲームに参加して勝ちを収め、賞金を手に小屋を飛び出し闇へと消えていく。

一方マイケルは、立派な勲章を携えて故郷のクレアトンへと帰ってくるのだが、皆の元に帰

りづらい気持ちを隠せなくて、帰還して数日経っても以前のような明るさはなくなっていた。ある時、スティーブンも故郷に帰還していることを知ったマイケルは障害者専用病院へと赴く。そこで両足と左腕をなくし車椅子生活を余儀なくされているスティーブンに衝撃を覚えると共に、毎月サイゴンから匿名でスティーブンに多額の現金が送りつけられてくるということを知ったマイケルは、直感的にそれがニックだという確信を持ち、崩壊寸前のサイゴンへと単身ニックを探しに行くことにする。そして行き着いた先はロシアンルーレットの闇賭博場であった、そこで奇跡の連勝を遂げているアメリカ人というのがニックだったのである。しかし、マイケルのことを覚えておらず、精神が崩壊したニックにマイケルが何を言っても無駄だった。苦肉の策としてニックとのロシアンルーレットでの勝負を申し出たマイケルは、一瞬、昔の記憶を取り戻したかに見えたが、結局リボルバーの引き金を引き、当たりを引いてしまったニックは頭から血を噴出しマイケルの腕の中で死んでいってしまう。ニックの亡骸を故郷へと運んできたマイケルは、そこで仲間と共に盛大な葬式を執り行い、共に悲しみにくれるのであった。

『プラトーン』ではクリスがバーズを射殺し、仲間と合流する場面から始まる。そこでアメリカ軍の負傷者が1,200人を超え、解放戦線の死者が500人以上だという報告を仲間から聞き、多くの同胞が犠牲になったことに驚く。先の戦闘で足を負傷したクリスは戦時病院へと向かうへりに乗せられ、そこで仲間「戦時病院に行けば、少し入院してすぐ除隊だ！よかったな」と告げられ、彼はその場で始めて笑みをこぼす。そして夕日が山にかかるのを見ながらこの長かった1年間を思い起こし、彼なりのこの戦争における答えを導き出すのだった。

ベトナム戦争敗戦の最大の理由はテレビというメディアの介入に端を発した反戦運動の拡大化であったように思える。ジャングルでの戦闘に苦戦したアメリカ軍が実行に移した枯葉剤作戦によりベトナム人の赤子に奇形児が続出した現状や、軍事拠点に限られているとされていた北爆が実のところは民家・病院・発電所にまで及び、北ベトナムの非戦闘民の犠牲者が数多く出ていることや、ソンミ村での虐殺で罪も無い村民が160人も虐殺された地獄絵図、サイゴンにあるアメリカ大使館の占拠(テト攻勢)により逮捕された解放戦線の面々が路上で次々と裁判も無しに処刑されていく様子がブラウン管を通して逐一伝わってきたのだ。それにより、アメリカ国民は初めて「我々の国は間違っているのではなからうか」という疑いを心に持ち始め、アメリカ全土に渡る反戦デモが起きた訳である。つまり、それだけベトナム戦争というのはアメリカの民衆に不評を買い、自国の恥とされたのだ。勿論、その戦争から帰還したアメリカ兵への待遇は第二次世界大戦の時のような華やかさはまるで感じられなかった。H・W・チャルズマというアメリカの評論家は当時の状況を見てこう語った。「彼らには暖かい故国の出迎しも無ければ歓迎のパレードも無かった。それどころか逆に、西海岸の空港に着くと唾を吐きかけられ、罵られる始末だった。家族は何の話も聞きたがらなかった。『忘れちまえ』と彼らは言われたのだ、『どこかに隠してしまえ』と。」<sup>109</sup>

ではそこで描かれる帰還兵の苦悩とは何なのか、それはマイケル自身が感じる日常への違和感と喪失感である。マイケルは周りが自分を歓迎してくれることに喜びを感じる反面、逆に心落ち着かないものを感じている。なぜなら非日常の戦場という環境で、解放戦線にはいつ殺されるか分からない状況の中で一年を過ごした彼にとって一年前の馬鹿騒ぎしてばかりいた日常に容易に戻ることは出来ないのだ。それだけ彼は戦場で肉体的にも精神的にも傷ついてしまったのだ。彼の胸には立派な勲章が携えられているにも関わらず、彼は皆が待っている自分の家

へと胸を張って帰ることが出来ずに、家に着く直前にあえて乗っていたタクシーを離れのモーターへと向かわせる。ベトナム戦争帰還兵であり世界中の人々に公演を続け、著者『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？』<sup>⑩</sup>がベストセラーになったアレン・ネルソンは、「帰還後に得たものは4つの勲章と400ドルのお金と、帰還後長い間苦しめられたPTSD(心的外傷後ストレス精神障害)だけだった」と語っている。

マイケルは未だニックが行方不明であり、スティーブンも車椅子なしでは動けない状態の中、自分だけ五体満足で帰ってきた事に罪悪感にも似た喪失感を覚えている。だから密かに想っていたリンダから "Can't we just comfort each other?" と誘われてもその気になれず、リンダに「何か様子が変わったみたい」と言われると "I feel a lot of distance, and I feel far away. I'll see you later." と発言している。そして興味深いのは帰還後のマイケルの様子が、三人がスティーブンの結婚披露宴で出会ったグリーンベレーにそっくりなことだ。戦場での体験を語りたがらず、常に暗い表情をしている様子がとても似通っていて、ここにチミノが意図的に伏線を張ったのは明らかである。そして帰還後のマイケルの心境を最も表しているのは、ディア・ハンティングの場面だ。仲間達に誘われて、帰還して初めてのディア・ハンティングを楽しもうとしていたマイケルなのだが、実際ライフルのスコープで鹿を撃とうとすると、引き金を引くことが出来ないのだ。以前はニック達に "One shot." (鹿を一発で仕留められないのは、恥だ!)と口癖のように言っていたマイケルが鹿を撃つことが出来なくなっている。ベトナムで解放戦線を撃ち殺し、味方もゴミのように殺されてきたのを知っているマイケルにとって銃の引き金を引くということは、あの狂った日常を思い出すことに繋がり、人間を殺すという事実を知った彼は、命あるものに対して容易に銃の引き金を引けなくなったのだろう。その証拠に山の宿泊小屋で仲間達がいがみ合い、一人が威嚇のために相手に銃口を突きつけたのを見たマイケルは激怒して、「人が死ぬのがそんなに見たいのか！楽しいのか！」と仲間の1人を殴りつける。銃口を人間に突きつける意味と責任を知っているマイケルには、たとえそれが冗談であったとしても許せなかったのだ。そしてその発言からは、人の命を玩具にして賭け事に興じていた解放戦線への強烈な批判をも見て取れる。

戦場を通して変わったのは、何もマイケルだけではなくスティーブンとニックにも当てはまる。スティーブンは戦場で左腕と両足を失い、帰国してから障害者病棟へと送られて車椅子生活を余儀なくされている。マイケルがそこへ尋ねた時にスティーブンは明るく彼を迎えるが、マイケルが "I'm gonna take you home." と言ってもスティーブンは家に帰ることを断固拒否する。アンジェラはスティーブンの変わり果てた姿を見てショックを受けて連日泣き崩れていた。その姿を見たスティーブンは耐えられなくなり家に居られなくなったのだろう。リンダもニックを失った悲しみから立ち上がれずに勤めていたスーパーの裏倉庫で泣きじゃくる場面があった。ベトナム戦争とは何も出兵した兵士だけが苦しんだ訳ではなくて、祖国で無事を祈っていた人々にとっても苦しみの日々が続いたという事をチミノは語り掛ける。

戦場で最も変化があったのはニックだった。戦場を通して生と死の一般的概念が崩れたニックは病院を脱走し、ロシアンルーレットの闇賭博場に入り込み一言も物言わずに淡々と引き金を引いていく。その姿には解放戦線の拷問で見せた苦渋の表情も躊躇いも感じられない、そして獲得した賞金を道路にばら撒いて闇夜へと消えていく様は、命の価値・お金の価値という人間が生きていく上で重要な価値観が完全に崩壊しているのを見て取れる。後にサイゴンまで迎えに来たマイケルを見ても、感情が崩壊し価値観が麻痺しているニックは、顔色一つ変えずに

マイケルとロシアンルーレットを始める。そこには、出兵前に "We get back from the war." "Would you marry me after that?" と発言していた優しいけれど、どこか臆病な面を持っていたニックはいない。昔のニックに戻ることを願い、ロシアンルーレットでニックとの対決を申し出て、そこでリンダの事やスティーブンの話を出すニックに反応は無い、しかしマイケルがディア・ハンティングの話を持ち出した時にだけニックは「一発か？」と聞き返す。感情を取り戻したかに思えたニックだったが、次の瞬間にニックは銃口を突きつけて、こめかみを撃ち抜いてしまう。頭から血を噴き出すニックを抱きながらマイケルは「愛している」と叫び、帰国した後の盛大な葬式を挙げるその姿はベトナムで散った五万人のアメリカ兵に捧げる姿ともとれる。特にラストの葬式後での立食会でマイケル達が歌うアメリカの伝統的な曲、『ゴッド・プレス・アメリカ』<sup>④</sup>はその極みを表している。「神よ、アメリカに祝福を、我が愛する祖国を見守り導き頭上より光もて夜の闇を照らしたまえ。山並みから白原白く泡立つ海辺まで、神よアメリカに祝福を。マイ・スイート・ホームに我がいとしの祖国アメリカに祝福あれ。」

この歌詞から見てもこの映画がアメリカの愛国精神を表したものであることは一目瞭然である。あえて作品のラストにこの曲をもってすることで『ディア・ハンター』の最終的なメッセージはやはり我がアメリカが傷ついた戦争、という構図だということがはっきりさせられる。傷ついた者の中に全くベトナム人が入っていないのも特徴であり、その証にマイケルやニックが闇賭博場に出会うベトナム人経営者や観客は、先の解放戦線の描き方となんら変わらない。それはベトナム戦争の真実から眼を離しているとも言える。しかしながら、当時のベトナム戦争を歪曲して記憶することは、アメリカにおいて、そう珍しいことではなかったようだ。70年代から80年代の初めまで歴史家や政治家はベトナム戦争でアメリカが何をしたか、何をされたか、という「真実」をなかなか語ろうとはしなかった。アメリカの罪という形が現れてきたのは、1981年1月20日の第40代大統領ロナルド・レーガンが就任演説で、ベトナム人に追悼の意を表したことなどが挙げられる。ベトナム戦争のきっかけを作ったマクナマラは戦後30年経った1995年に、初めてTVで「ベトナム戦争は誤りだった。」と謝罪し、著書『マクナマラ回顧録』で初めて自分が間違っていたと説いたのである<sup>⑤</sup>。

では70年代に歴史家達の間で最も語られたのは何なのか、それは戦略的仮定論だった。つまり、「もし〜していれば、もし〜がなければ」といった If ~の世界であり、アメリカが負けたという事実を認められない人々は「歴史にもしもはない」という法則を棚に上げて戦略の見直しを、まるでゲームを振り返るかのように熱く答弁しあっていたのだ。第二次世界大戦を勝ち、世界に正義をもたらしたと信じるアメリカ国民のアイデンティティーには、敵に負けたという事実はあまりに重すぎた。だからこそ、アカデミーの世界ではベトナム戦争は「負けた戦争」ではなく「破綻(または失敗)した戦争」と呼ばれ続けたのだ。ベトナム戦争からの撤退を決意したニクソン大統領ですら、1973年1月27日にウィリアム・ロジャース国務長官がパリ和平協定に調印した時に、アメリカはベトナム戦争で遂に勝利を収めたのだ、と語っている。この時代のアメリカ人は揺るぎないアイデンティティーを崩壊させないために必死になっていた、その片鱗がチミノの演出からも垣間見えるようだ。

ベトナムの悲惨だった状況やアメリカの侵した様々な罪が戦後改めてクローズアップされたのは、帰還兵が次々と自伝を書いたことによるところが大きかった。それまではベトナム戦争を歪曲したり、無理に忘れようとしていた人も徐々に真実に気付かざるを得なくなってきたのである。そんな80年代に生まれた『プラトーン』が、このパラグラフで取り扱うのはクリスが

出したベトナム戦争という答えについてである。クリスを通して語られる、恐らくストーンの戦争論にも繋がるであろうセリフを中心に見ていきたい。"I think now, looking back we did not fight the enemy. We fought ourselves and the enemy was in us. The war is over for me now, but it will always be there the rest of my days. As I'm sure Elias will be fighting with Barnes for what Rhah called possession of my soul. There are times since I have felt like the child born of those two fathers. But be that as it may those of us who did make it here an obligation to build again. To teach to others what we know and to try with what's left of our lives to find a goodness and meaning to this life."これがクリスのベトナム戦争に対する答えだった。つまりベトナム戦争でのアメリカの敵はベトナムではなくアメリカ自身だったと強く唱えているのだ。"We fought ourselves and the enemy was in us."というフレーズは兵士一人一人が自身のアイデンティティーをいかに保てたかという意味である。戦場という非日常空間において変わっていく「自分という存在」に戸惑いを隠せず困惑していく姿は『プラトーン』でも自身のアイデンティティーを剥奪されて兵士として変わっていく姿を鮮烈に描写している。

しかしこれは決してフィクションだけの世界ではなく、アレン・ネルソンも海兵隊に所属した当初、教官に習ったことは「命令に従うこと」であり、「疑問を持つことなく命令に従うこと」だったと言う<sup>(23)</sup>。自分のアイデンティティーを喪失させ、非人間的なアイデンティティーを植え付けようとする行為自体が本当の憎むべき敵であり、その一度植え付けられた感情はそう簡単に消えるものではないのだ、とストーンは語り掛ける。

"As I'm sure Elias will be fighting with Barnes for what Rhah called possession of my soul. There are times since I have felt like the child born of those two fathers." というくだりはこの作品の根底に位置しているものだ。つまりバーンズとエリアスを通してアメリカの狂気と道徳を映し出すのが『プラトーン』の目的であり、奇しくも二つの要素ともに「アメリカの正義」を表しているのだ。その二つの要素に挟まれて苦悩したのが、クリスを通して語られる実戦に赴いた兵士達であった。アメリカの戦争において、狂気と道徳は常にコインの裏表のように切っても切り離せない存在だ。常に道徳的な主張を振りかざし自由と民主主義の絶対性を持ち上げる、しかしその裏にあえるのは、アメリカの独りよがりな理想のためには手段を問わない狂気のある存在である。「自由は命より重い」というアメリカ独自のアイデンティティーにおいて、ぼろが出てきたのがベトナム戦争だったのである。一度表れた綻びは人々の中から消えていくことはないし忘れることは出来ない。そして、このコインの裏表はいつまでも矛盾をはらみながら続いていくのだ、それこそプラトーン(ギリシャ語で永遠の意)のように……。

"To teach to others what we know and to try with what's left of our lives to find a goodness and meaning to this life." という最後の一説にも、戦場を経験した我々兵士は決してアメリカの綻びと罪を忘れてはならない、そして戦場を知らない人々にそれを伝えることこそが我々の義務なのだ、というメッセージが見て取れる。オリバー・ストーン自身やアレン・ネルソン、また、戦争における正義・悪の判断ほど曖昧なものはない、と代表作『本当の戦争の話をしよう』<sup>(24)</sup>で力説したティム・オブライエンや、1969年のウッドストック・フェスティバルで一躍名を馳せ、ベトナムからの帰還後に様々な反戦歌を作り続けたカントリー・ジョー・マクドナルド<sup>(25)</sup>等、メディアを通して戦争の過ちを伝えた帰還兵は数多くいたのだ。これらの呼びかけは決して無力ではなく、偽りの平和という表向きの大義に隠された自国の罪をいつの日か皆が自覚し、それがアメリカという大国のアイデンティティーを変えるきっかけになれば、という決意こそ

がストーンをはじめとするベトナムの語り部達の希望であり義務なのだろうと私は考える。

## V. 結び

国と国との外交において戦争というキーワードは外すことの出来ないものだと思うし、「戦争なんて無い方が世界は平和になれる」と綺麗事での論文を締めくくるつもりは毛頭ない。日本も第二次世界大戦において中国やアメリカといった大国を相手に戦争を繰り広げた、それは独裁国家と定義付けられた日本が全て悪かったという形で相手国は納得しているが、それでも日本には日本の戦争に対する大義がそこに存在したのだと思う。しかし例えば、アジア諸国がヨーロッパの植民地として吸収されていく中で、自国を守るために戦争に踏み切らねばならなかった当時の日本のアイデンティティーをいくら説明した所で、それが他国で理解されることはないはずだ。戦争で敗北した国のアイデンティティーが理解されることは決して無く、敗戦国は悪というレッテルを貰い戦勝国の理想をなすがままに受け入れることしか道は残されていない。

アメリカはその境遇をベトナムで始めて味わい、アメリカの戦争=Good warという固定観念が世界中とアメリカ国民の中で揺らぎ始めた。ベトナムという国自体が旧ソ連やドイツといった軍事大国ではなかったために、アメリカ本土に直接的な影響は無かったが、それでもアメリカという国は今までにいくらいに傷ついた。そしてその傷を癒すために選んだ手段というのは、より強い国、二度と負けることのない国を作り上げることであった。イラク戦争の報道を見ていて思うのは、アメリカが再度同じ事を繰り返しているということだ。2004年11月に起きたイラクの主要都市ファルージャ制圧は武装勢力1,000人以上の犠牲者を出して一週間足らずでファルージャを制圧した。その姿はベトナムで軍事目的という口実で壊滅させられた、ソンミ村やクエンガイ付近の村々で起こった虐殺を連想させる。しかし、ベトナムの時のようなメディアの規制(プロパガンダ)をかけているために、犠牲になったファルージャの非戦闘員の死者数は公表されていない。戦争のきっかけとなった、同時多発テロ(イラク戦争)とトンキン湾事件(ベトナム戦争)もアメリカが戦争を始めるきっかけが欲しかったためにアメリカ政府があえて黙認していたという推測も最近では強まっている。その他にも劣化ウラン弾と枯葉剤というハーグ条約に反する兵器の使用、トマホークミサイルの乱発と北爆、捕虜に対する虐待と同じ道をなぞっているとしか言えないのだ。逆説的な言い方をすれば、現在のアメリカにとってのベトナム戦争とは、二度とアメリカが負けないための糧となっている気がしてならない。そしてその原動力となっているのは、いつの時代も自己のアイデンティティーの押し付けだ。独裁国家、共産主義といった彼らの常識の範疇を超えてしまっているものに対しては、理解するという道は初めから用意されておらず、全て「悪」という一語で片付けられるようだ。ペンシルヴェニア大学の名誉教授である評論家のエドワード・ハーマンはアメリカ軍がファルージャ制圧作戦に乗り出した時、「ファルージャを救うために、我々はファルージャを攻撃しなければならぬ」<sup>90</sup>と述べていた。そのようなエゴイズムで傷つくのは、アメリカ軍として出兵している未来ある市民達だ。

ベトナム戦争以後のアメリカの戦争は大義が曖昧になり、ただ強大な軍事力を振りかざしているようにしか思えない。ベトナム戦争はアメリカのアイデンティティーにおける変革期であり、「敗北=許されざるもの」という構図が彼らの間で強まった。皮肉にもアメリカ自身が大量破壊兵器の更なる導入、国連の忠告無視といった、勝利するためなら手段は選ばないといった



世界における独裁国家になりつつあるのだ。大義なき戦争こそが悪そのものだということに気付かないアメリカの将来はどこへ向かおうとしているのか。確かにアメリカという国は世界において最大の影響力を持っている国だということは認めざるを得ない。しかしだからこそ「自分達がルールだ」というアイデンティティーを持つのではなく、外交に対して視野を広げ、世界中から尊敬される真の正義の国を体現してってもらいたい。今こそ彼らにとってベトナム戦争とは何だったのか、敗戦から何を学ぶべきだったのかを考えてもらいたいと思う。公表されているだけでも一万人以上の犠牲者が出ており、今なお止まることを知らないアメリカ兵とイラク市民の犠牲者に哀悼の意を表し、この論文を閉じたい。

#### 註

- (1)天然ウランから核燃料になる濃縮ウランをつくる時に副生する劣化ウランを使用した弾丸。比重が19と重く弾丸の貫通力が通常の弾丸より強い。劣化ウランはガンや白血病を誘発する場合があります、後遺症も残るため、現在使用中止を求める声が広がっている。
- (2)別名ベトコン、しかしこれはアメリカ軍が一方向的に付けた蔑称なので、ここでは解放戦線と統一する。
- (3)1964～73年まで続いたアメリカ軍による北ベトナムへの爆撃の略称。9年間にかけて投下された爆弾量は約60万トンにも及ぶ。
- (4)マクナ马拉長官の提案でジャングルに潜む解放戦線に対し、オレンジ作戦(エージェント・オレンジ)米軍によるジャングル破壊の為に枯葉剤散布のこと。猛毒ダイオキシンを含んだ薬剤がオレンジ色だったことにより名が付いた。枯葉剤に含まれる毒素は人体に大きな影響を及ぼし、ベトちゃんやドクちゃんははじめ先天障害をもつ子供が多数生まれた。1961年から行われ作戦最盛期は1967～69年、70年頃には終息へ向う。ベトナム戦時中を通じてアメリカ最大の汚点。
- (5)アメリカ軍海兵隊が65年3月にベトナム中部一の大都市ダナンに上陸し本格的な陸地戦に突入した。南ベトナム解放戦線基地を中心にB52による空からの大規模爆撃も開始。最終総兵力54万人を動員した。
- (6)1968年1月、テト(ベトナムの旧正月)に解放戦線による一斉蜂起が起こった。解放戦線は地方の主要都市と南の首都・サイゴン市で蜂起、サイゴン市では大統領官邸・軍中枢・アメリカ大使館を襲った。このうち「アメリカの要塞」と呼ばれた堅固な大使館はわずか20名によって占拠され、この模様は世界に生放送された。
- (7)*Born on the 4th of July* (1989) 監督オリバー・ストーン 主演トム・クルーズ。
- (8)*Heaven & Earth* (1993) 監督オリバー・ストーン 主演ヘップ・ター・リー。
- (9)Geronimo(1829～1909)アメリカのインディアンでありアパッチ族の指導者。原住地であるアリゾナ、ニューメキシコ地方に進出した白人に対して激しく抵抗したが、1886年に降伏。
- (10)<http://www.jca.apc.org/~yyoffice/Son%20My/A%20look%20back%20upon%20Son%20My.htm>参照。
- (11)当時のアメリカ軍士官ウィリアム・カーリーははじめ殺害に関与したとされる者は相次いで起訴されたが、告発がすぐに取り下げられたり、すぐに仮釈放の恩赦が加わったりと、表面上でのみ裁かれたといっても過言ではない。
- (12)『ディア・ハンター』(1993)Warner Home Video 解説書より引用。
- (13)第51回アカデミー賞授賞式では、『ディア・ハンター』がベトナム人を不当に描いている作品だと、会場前で一般市民による反対デモが起きた。

- (14)1954年4月、アイゼンハワー大統領とダレス國務長官の対旧ソ連共産主義防止理論。ベトナムが赤に染まりインドシナ半島が共産化することにより、ドミノのパイが倒れるように東南アジア周辺諸国全土が共産主義国になるという理論。アメリカのベトナム介入の根拠となった。
- (15)実際の当時の解放戦線の証言＝我々は敵ほど武器を持っていなかったから、頭を使う必要があった。罾を仕掛け、待ち伏せし、単純だが必殺の武器を使った。アメリカ兵はのろまで不器用だった。ジャングルを通るときは特に、象のように動きが鈍かった。われわれは三人一組で行動したから、武器も簡単で、物音を立てずにすばやく動けた。アメリカ兵を一人でも負傷させるか殺すかして、また一日戦えるなら、それが勝利だった。水滴が石に穴をうがつるように、アメリカの軍隊を磨耗させるつもりだった。 『映像の世紀・ベトナムの衝撃』より引用。
- (16)生井英孝(2000)『負けた戦争の記憶 歴史の中のベトナム戦争』三省堂、100頁参照。
- (17)戦時中の捕虜には人権が存在し、これを尊重しなければならないと1907年に定められた法。
- (18)何人も拷問又は残虐な、非人道的な若しくは屈辱的な取扱若しくは刑罰を受けることはないと1948年に定められた法。
- (19)反戦運動の若者の総称。
- (20)アレン・ネルソン(2003)『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか?』講談社、参照。
- (21)同時多発テロ～イラク戦争の時にもアメリカ本土でこの愛国歌をテレビやラジオで聞かない日はなかったという。セリーヌ・ディオーンやリアン・ライムスといった人気歌手が次々と、この歌のカバーをリリースした。
- (22)このマクナマラの反省は出版直後に強烈な反発と非難にさらされることになった。ニューヨーク・タイムズの記事を代表して参照すると、「悲惨な現実を把握するのにどれだけ時間をかけたかと思っているのか、マクナマラ氏の後悔がいかに大きなものだろうと、この本と我々の亡くなった兵士達とは釣り合いが取れない。いまさらお詫びだの陳腐な涙だので埋め合わせることなど出来はしないのである。」
- (23)<http://www.coara.or.jp/~yufukiri/allen.html>参照。
- (24)Tim O'Brien(1990) *The Things They Carried* 文藝春秋、参照。
- (25)Country Joe McDonald's(1942～)ベトナム戦争ではアメリカ軍陸軍に所属しており、退役してから先導的な反戦歌の作詞作曲を手掛け、当時の若者のアイデンティティーに大きな影響を与えた音楽家。フローレス・ナイチンゲールの精神を尊重しており、その研究家としても有名。
- (26)<http://terasima.gooside.com/herman041108fallujah041123.htm>参照。

#### 参考文献

- 生井英孝『負けた戦争の記憶 歴史のなかのベトナム戦争』三省堂、2000年。  
 陸井三郎『資料・ベトナム戦争 上』紀伊国屋書店、1968年。  
 陸井三郎『資料・ベトナム戦争 下』紀伊国屋書店、1969年。  
 吉澤南『ベトナム戦争 一民衆にとっての戦場』吉川弘文館、1999年。

#### 参考インターネット

- 兵士よ故郷アメリカへ帰ろう!、<http://www.coara.or.jp/~yufukiri/allen.html>  
 ソンミを振り返る、<http://www.jca.apc.org/~yyoffice/Son%20My/A%20look%20back%20upon%20Son%20My.htm>  
 アイヒマン実験、<http://tcnweb.ne.jp/~sikizeku/62.htm>

「タイガーフォース」住民虐殺事件、<http://www.asyura2.com/0411/war61/msg/731.html>

#### 参考映像資料

マイケル・チミノ『ディア・ハンター』ジェネオン・エンタテインメント

オリバー・ストーン『プラトーン』20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン

オリバー・ストーン『7月4日に生まれて』ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

スタンリー・キューブリック『フルメタル・ジャケット』ワーナー・ホーム・ビデオ

マイケル・ムーア『華氏911』ジェネオン・エンタテインメント

オリバー・ストーン『天と地』ワーナー・ホーム・ビデオ

『映像の世紀・ベトナムの衝撃』NHKソフトウェア

#### <謝辞>

本論文を書くに当たり、本学卒業論文担当教授松崎洋子先生に種々ご指導を賜りました。また、完成に至るまで国際文化学科二年、尾身拡夢をはじめ先輩・友人に多大なる援助を頂きました。ここに記して厚く感謝の意を表します。

(卒業論文指導教員 松崎洋子)

# A Study of The Vietnam War and American Identity through Two American Movies: The Memory of Defeat

<Abstract>

01E002 Shusuke Adachi

When the United States attacked Iraq in 2003, I seriously wondered if the United States had had justifiable reasons. I wanted to study history of American wars to understand why America has fought so many wars.

I chose the Vietnam War presented in the two Oscar winning movies; *The Deer Hunter* and *Platoon*. It is the only war America lost, and I found American identity appears in very interesting manners in these movies.

The theses is divided in three parts: 1) The comparison of the movies with regard to the situations and attitudes of the characters during the period before they headed for Vietnam. In *The Deer Hunter*, Michael Cimino, the director, presents characters' naive patriotism about having to go to the war. In *Platoon*, Oliver Stone introduces the main character as an idealist seeking for "fair society". 2) The comparison in the actual war scenes, where in *The Deer Hunter*, the North Vietnam soldiers are described as pure evil. On the contrary, American soldiers in *Platoon* are cruel invaders who destroy innocent village people of Vietnam. 3) Differences in treating characters after the war through the psychological and physical conditions of the main characters. *The Deer Hunter* shows that America lost many things and the nation and its people were deeply hurt, but it should be noted that the movie mentions nothing about the losses and sufferings of the Vietnamese. Oliver Stone's *Platoon* claims it is America that is evil and wrong, and the soldiers who experienced this war must keep telling the truth to fellow Americans.

The comparison reveals the contrast of American attitudes toward wars and the uncertainty of American identity.